

クララ・デニスン・ルーミス女史が日米開戦直前に語った日本人像 それが日本研究にもたらした影響

著者	福井 七子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	2
ページ	111-132
発行年	2010-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/2633

クララ・デニスン・ルーミス女史が 日米開戦直前に語った日本人像

—それが日本研究にもたらした影響—

福井七子
FUKUI Nanako

はじめに

クララ・デニスン・ルーミス女史に関する資料に出合ったのは、2009年7月末から8月にかけてイギリスのサセックス大学での資料調査の時であった。ここ数年ルース・ベネディクトの日本文化論及び日本人論誕生に影響を与えたと思われる関連資料収集に学問対象を置き、できる限り広範囲に資料を集めたいと思っていた。殊に最近では、日本人研究において先駆的な役割を果たしたイギリスの社会学者ジェフリー・ゴラーの研究を行っており、彼の学問的裏付けとなった資料を発見できれば幸いと願いつつ、サセックス大学に出かけた。二度目の訪問であったためか、色々と便宜を計らってくれた。

ゴラーに関する研究をしていて、何かすっきりせず、腑に落ちないことがずっと私を支配していた。それは、なぜゴラーが日本人研究をしたのか、あえて言うなら研究をしえたのかという疑問であった。しかし、これまで決定的な資料を発見することはできなかった。そのため、その疑問解決の糸口を見つけられたらという思いで、意を決しイギリスに出かけたのであった。かつて見た資料も含めて再検討すべく、スペシャル・コレクションが用意してくれた資料の入ったボックスを次々に開けていった。そのなかの一つに古い新聞が入ったBoxがあった。その新聞のフロントページ全面を使って書かれていたのがクララ・ルーミスの紹介と、彼女の40年



クララ・デニスン・ルーミス女史
(写真提供：横浜共立学園)

に亘る日本滞在中から得た日本人に対する思いを語った記事であった。吸い寄せられるようにその新聞に見入った。この新聞に登場する人物こそが、ゴラーのインフォーマントの一人として、様々な聞き取り調査に協力した女性であった。

新聞にはいくつかの写真も掲載されており、一つはクララ・ルーミスの写真、その左側には彼女が働き始めた頃の古い学校の写真、そして右側には1941年当時の学生数の増えた新しく建てられた学校の写真が載せられていた。ちなみに新しい校舎は建築家ウィリアム・ヴォーリスによって設計、建築されたものであった。

(Gorer Collection 以下 G.C. とする。G.C. 1)

おそらくこの新聞が契機となってゴラーは彼女に連絡を取り、インフォーマントとして働いてくれるように要請したに違いない。新聞にはいくつかの訂正がされている。例えば、30年の日本生活と書かれている箇所は40年と訂正され、またルーミスが横浜の女子学園で instructor であったと書かれた部分は、principal に、そして Loomis と書かれたところが、すべてではないが3ヶ所にわたって Clara と書き直されている。インクで書かれた訂正箇所はおそらくゴラー自身が書いたものと思われる。

ゴラーはエール大学の研究員として心理学に焦点を置いた文化とパーソナリティー研究を開始していた頃であった。この新聞は *New Haven Register* と名付けられているように東部の一地方新聞であった。しかし、ニュー・ヘイブンのエール大学にいたゴラーにとっては幸いに働いた。

この論文では第二次世界大戦の直前、新聞を通してクララ・ルーミスが日本人について語った内容を紹介するとともに、その後にゴラーが書いた最初の日本人論である「日本人の性格構造とプロパガンダ」にどのように生かされていったのかを明らかにしていきたい。この古ぼけた1941年の新聞を資料として目にしたのはおそらく私が最初の日本人ではないかと思われる。セサックス大学のゴラー・コレクションを訪れた日本人はほとんどいないからである。横浜共立学園にあるルーミス資料室もこの新聞の存在については知らないようであった。

本論文を通して、学習院大学の河合秀和名誉教授が私にかつてお尋ねであった「ジェフリー・ゴラーという人物はどのような人ですか」という問い掛けに若干でもお答えできることを願っている。河合先生は、詩人・小説家であるとともに評論文・エッセイなどを書き名声を獲得した『動物農場』の著者であるジョージ・オーウェルが著した日記を翻訳されたのだが、その日記のなかに何度かゴラーが登場することから非常に興味をもたれたようであった。オーウェルとゴラーの共通した研究テーマとして考えられるのが、オーウェルは1941年にBBCに入社し、東洋部インド課で東南アジア向け宣伝番組の制作に従事したことがあるが、ゴラーもプロパガンダやマス・オブザベーションを研究のテーマの一つとして考えていたことであろう。

日本ではルーミスの存在は英語教育の学会誌¹⁾でも紹介されたことがある。

1. クララ・デニスン・ルーミス女史の背景

クララ・デニスン・ルーミス女史は1877年10月14日カリフォルニア州サン・ラファエルに誕生した。そして当時の共立女学校、現在の横浜共立学園の第四代校長として就任したのは1901年12月、彼女が24歳の時であった。その後、35年間校長をつとめ、1936年校長を辞し、同年の11月30日にアメリカに帰国した。その翌年の3月17日には藍綬褒章を受章している。

彼女の父親ヘンリー・ルーミスは長年にわたって宣教師として日本で活動した。ヘンリー・ルーミスは1939年ニューヨーク州バーリントンの農家に生まれ、ハミルトン大学に入学したが南北戦争のため義勇兵として1861年に参加し、1865年に同大学に戻った。1866年からオーバン神学校に入学し卒業した牧師で、保守的な信仰と高い教養を備えた紳士であった。ルーミスの先祖は、イギリスから自由の天地アメリカにやってきた頑固なピューリタンであった。日本にキリスト教をもたらした多くのプロテスタント系宣教師たちの先祖は、ニューイングランドに上陸し、アメリカ西部へ広がっていった。その信仰は、聖書を絶対的なものとし、個人の回心を重視し、伝道に熱心であった。日本でルーミスのもとに集まった氏族の子弟たちは旧幕臣や佐幕派で、明治維新によって出世の道を閉ざされ、日本社会から孤立した集団であった。

(岡部：2000：7-8)

ルーミスは長老派教会評議員(理事)を5年勤め、また米国聖書協会には30年所属していた。そして、1872年には1845年6月14日生まれ of ジェーン・ヘリング・グリーンと結婚した。ジェーン・ヘリング・グリーンはマサチューセッツ州ロックスベリー出身で、American Board of Commissioners for Foreign Missions (米国外国伝道委員会)の初めての幹事デヴィッド・グリーン of の娘でアメリカン・ボードの初めての宣教師ダニエル・クロスビー・グリーン of の姉妹であった。アメリカン・ボードは1890年に設立されたアメリカでもっとも古い超党派的な外国伝道組織である。はじめインド、中国などに宣教師を派遣していたが、日本には1869年、宣教師D.C. グリーンがはじめて上陸した。現在はUnited Church Board for World Ministries (UCBWM)と改称され、世界各地に宣教師を派遣している。

(『同志社—その100年史のあゆみ』：1975：19)

1872年5月24日、夫妻は横浜にやってくる。当時は、キリシタン禁制の高札が撤去される前で、苦勞が偲ばれる。夫妻が来浜する前には、ヘボンなどによってキリスト教伝道は始められていたが、ルーミスは1875年、日本初の長老派教会である横浜第一長老公会を誕生させ、賛美歌集の編纂にも力を注いだようである。

(岡部：2000：3-9)

二人の間には6人の子供がいるが、クララは長女であり、三番目の子どもでもあった。クララはアメリカに生まれたが、上の二人は日本生まれであった。父親が病を得て1876年一時アメリカに帰り、1881年に再び横浜に戻るのだが、アメリカ滞在中に誕生したのがクララとその下に誕生したEvarts Greene Loomis Jr.であった。(資料提供：横浜共立学園“Loomis家の家系図”)

クララは3歳の時に来日し、その後、学業のために帰米した。1893年マサチューセッツ州のニュートン・ハイスクールに入学し、1900年にはスミス女子大学で学び、学士号を取得した。1901年にはコロンビア大学とユニオン神学校（現在はコロンビア大学の一部に属する）を卒業し、修士号を取得した。その後、24歳の時に日本に帰ってくる。そして、横浜共立学園の校長として35年に亘って学校教育に尽力した。1936年に校長職を辞し、1937年から1938年にかけてニューヨーク州イサカのホーム・エコノミクス・カレッジでコースを取得し、1939年から1940年には京都の同志社大学で教鞭をとった。戦争への危機が益々強くなり、アメリカ人は日本を出ることを余儀なくされたため1941年にアメリカに帰国したのであった。コネティカット州のニュー・ヘイブンに落ち着いた後、ウェスレヤン大学で一学期間教えた。その後は引退したミッシヨナリーの保養所クレアモント・ホーム（カリフォルニア）に住み、1968年9月5日に90歳で亡くなった。（資料提供：横浜共立学園）

今回、サセックス大学で目にすることができた新聞には彼女の当時の生活が偲ばれる個所がいくつもある。また1941年11月という年代を考慮すると、クララ・ルーマイス女史が日本から帰国した後、ニュー・ヘイブンで落ち着いた頃のことであり、彼女が語る言葉にはこれから始まることになるアメリカと日本との対戦を前にして、彼女の複雑な思いがよく表れている。アメリカで日本人研究が集中的に行われるようになったのは1942年から1944年頃であり、ジェフリー・ゴラーは比較的早い時期に日本研究に取り掛かった一人であった。彼の日本研究の詳細については後に述べることにするが、彼が日本研究を開始したのは1941年12月であった。つまり、この新聞記事が一つの契機となったことは明らかであろう。

ゴラーによってまとめられた日本研究の最初の論文、そしてその後続くアメリカでの本格的な日本研究、日本文化研究の糸口をゴラーが与えたという意味から、新聞の資料を紹介することは意義あることと考える。資料として巻末にまとめることも考えられたが、本論文の主たる目的は資料を紹介し、若干の分析を加えるという意味から、敢えて資料を本文の中に入れ、文末に入れることは避けた。なお、翻訳は訂正されたものを基にした。

New Haven Register, Sunday, Nov. 23, 1941

アメリカの教師、日本の生活を語る

島国の帝国で30年以上過ごしたクララ・D. ルーマイス女史、ニュー・ヘイブンでの静かな生活に戻る

米国と日本は毎日に戦争に近づくにつれて、一般のアメリカ人は潜在的敵国についてほとんど知らないことが明白となってきている。クララ・デニソン・ルーマイス女史は日本の学校と大学で教育者として40年以上働き、最近ニュー・ヘイブンに帰ってきた。国民的な心理に影響を与えてきた日本人の精神や感情の機微、そうしたことをあまりにも無視した

ことが、現在の行き詰まりを招いた原因の一つであることを指摘している。

ルーミス女史は現在の重要な局面においては、東洋とアメリカとの心理上の相違といったことが、更に広く理解されることが重要であると考えている。彼女が確信を持っていることは、日本人は有効的な交渉を確立するための前進をみる前に、日本の立場に立ってもらい、自分たち日本人が信用されているということを感じるということが重要であるとルーミス女史は感じている。日本人の名誉に訴える方が力の脅威より、何かを成し遂げるためには効果的である。

アメリカにおいて日本人が誠実であるという評判は、これまで全く得たことがなかった。ポーカー・フェースと契約を簡単に破るということは、この島国の人々の商売上の特徴として長く語られてきた。しかし、多くの西洋人たちは長年の間、何の問題もなく日本人と商売をしてきており、日本人からは公平で礼儀正しい扱いを受けてきた。誤解の大部分はアプローチの方法の違いに因るものである。日本人は、子ども時代から自分の感情をコントロールするように教えられていることを、ルーミス女史は指摘している。従って、観察する人は、日本人の表情の根底にあるものを理解することができないうちは、ある状況に対する時の日本人の反応を認識することはむずかしいと述べている。さらにまた日本人は、外国語に弱いことを認識しており、日本語以外のいかなる外国語を話す時も、誤りを犯すことを非常に恐れている。多くの場合、日本人は本当に簡単な説明さえすれば誤解が取り除かれる時にも、ずっと黙っている。

日本人の真実に対する態度は、また混乱を生じさせるものである。主要な美德は、楽しみを与え、相手の精神をリラックスさせることである。真実を語ることによって、人を傷つけたり、不快を与えたりするようなら、日本人はそれを控えるように教えられている。一般にこうした態度によるだまし方は、アメリカ人がお互いにそう思っていないにもかかわらず、「お会いできて光栄です」と言うのとさほど変わらない。嘘をついていることを責められた時、日本人は一般的に全く当惑もせず、あなたの気持ちに負担をかけないようにしているだけです、と説明する。

ビジネス上の取引における不誠実さは、商人が社会階級の最下層にあった数百年前の封建時代に起源をもつものである。商業上の取引は、何時間にも及ぶ話し合いを意味し、取引が合意に達するまでには冗談を言い合ったり、酒を酌み交わしたりする。一旦、取引が成立すると、それは現行の市場価格に基づいたものである。例えば、絹の値段がその後高騰していた場合は、商人には対応の仕方として三つの可能性が考えられる。商人が取引をする場合、第一に考えられることは量を減らすこと、第二には品質の悪いものを与えること、そして第三には契約を破棄することである。西洋の方法を知らない日本人にとっては、ほどほどの儲けなしに商取引を行うことなど考えられないことである。条約や契約についても、同じ考え方が適応される。状況が少しでも変化すれば、条件上のいかなる変化

も、それは同時に契約の無効を意味し、取り消されるものであると日本人は考えるのである。

商売上の礼儀

商人はかつて軽んじられていたため、金銭を扱うことは品位を下げることとして考えられていた。そして自分と同等の人にお金を封筒やきちんとした白い紙で包まれない限り、お金を手渡しすることは非礼なことだと考えられていた。今日でも、個人が授業料を持ってきたりする時も、必ずプレゼントか何かに添えて包んで渡される。メイドに与えられるチップでさえ、謝意を表す印のついた封筒に入れられるか、紙で包まれるのが礼儀である。日本では西洋以上に、何かをしてくれた人へのお礼としてお金をあげることは失礼であり、代わりにプレゼントや果物が入ったバスケットを持って挨拶に行く。

中国で行われている値切る習慣は、日本にはほとんどない。日本の宿で高額な宿泊料金が課されるのは名誉だと思われており、疑問を差し挟むことはめったにない。なぜなら、それはお客が社会的に高い地位の者として扱われたということになるからである。しかしながら、近代的なホテルでは料金は決められており、この限りではない。

日本人が信用できないため、すべての日本の銀行では中国人が雇われているという話は、1870年、香港上海銀行が中国から計算のための技師を連れてきた頃に遡る。なぜ日本に連れてくる必要があったのかというと、中国では大都市と各地域でそれぞれ独自の通貨を持ち、「大きな通貨」「小さな通貨」という区別がなされていたからである。その結果、この複雑な通貨の換算をするのに、そろばんを持った中国人を雇用する必要が生じた。しかし、日本人もこの計算ができるように訓練され、責任ある地位につくことができるようになった。事実、ニューヨークのナショナルシティバンクは極東支店の主要なポジション以外では、地元の人を雇用している多くの銀行の一つである。日本銀行のように、より大きな日本の銀行、そして横浜銀行では最高の高い水準の企業倫理に基づいて取引を行っている。

東洋人の「ネコババ」

日本人の使用人がものをくすねるという噂をよく耳にするが、それは単にお店に行った時、お得意様だから与えられるおまけ程度であり、そのようなサービスはたとえ世帯主がそのお店で買ったとしても同じ待遇を受けるはずである。信頼できる使用人は、西洋人から見たら非常に低い賃金をもらっているにもかかわらず、使用人はそれで家族を養っており、食事は自分でまかない、許可が得られなければ、雇い主からの支給物を当てにすることはないという忠実ぶりである。

ルームスさんは言う。「横浜と京都の2つの街で30年以上も生活しましたが、夜以外は家の鍵をかけたことは一度もありませんでした。貴重品を金庫に入れることもありませんでした。私たちは使用人たちを信用していましたし、例外なくみんな信頼するに値する人たちでした。私たちの代わりに、学校の用務員に数百円単位の銀行取引によく行ってもら

ったりもしました。』

「私たちが夏の間過ごすために借りた場所に、家の料理人を同行したことがありました。街にいた時は3人で行っていた仕事を、彼と彼の奥さんの2人でしなければならず、さらに不便な状況でなければならなかったので、賃金のアップを提案したのですが、月末に給料を手渡そうとすると、彼は、出費も幾分か少なくなったので、普段の額以上は受け取るつもりはありませんときっぱり主張しました。その後しばらくして、家政の仕事が必要ではなくなった時、その料理人は、家族で仕出し屋を始めればうまくやっていけるだろうと考えました。しかしそれには賃金が必要だったので、200円貸してくださいと依頼してきました。当時で約75ドルに相当します。少し考えましたが、来年私がアメリカへ帰る時に全額返すという条件で貸すことにしました。指定していた日時に彼は来たのですが、商売や市場開拓の難しさに苦労したため、半分のお金しか用意できませんでした。期待が裏切られたような気もしましたが、5年間彼と彼の家族が私たちのために献身的に働いてくれたことを思い起こし、私は借用書を破いて、残りのお金は、彼の成功を心から祈念しての贈り物にするからと、彼に言いました。彼は、深く感謝の言葉を述べて帰って行きました。それから2年が過ぎ、私がまた日本に戻ってきた時には、その料理人は電車とバスで2時間もかけて、わざわざ会いに来てくれたのです。彼は温室で育てられた果物が入った大きなバスケットと、まだ借りている分だと主張して残りの100円を持って来ました。』

「1923年に大震災が起こった時の献身的な日本人の使用人たちの話もたくさんあります。例えば、自分の命を投げうってまで、白人の子供を助けようとしたとか、その子どもを抱えたまま安全な場所まで何マイルも運んでくれたとか。火事場泥棒のようなことをした人間は、おそらく刑務所から逃げてきた人か、極貧で食べ物に飢えていた人か、着るものを必要としていた人に違いありません。私の所有物や、私の多くの友人の所有物は大変なリスクを負ってまで、日本人によって守られ、丁寧に持ち主に返されました。』

「小包や傘を見知らぬタクシーの運転手に持ってきてもらったことも何度もあります。人力車の車夫は、アメリカから着いたばかりの女性を、私の東京にあるおじさんの家で一晩過ごすために連れていったこともあります。人力車で半時間ほどかかる所でした。次の朝、その運転手がまたやって来て、自分が乗せた客に面会を求めたのですが、すでに朝早くの電車で行ったことを知らされて、とてもがっかりした様子でした。叔父は、質問しているうちにわかったのですが、この運転手は人力車のなかに5ドル金貨があるのを見つけたので、女性にどうしても返したかったとのことでした。結局、その金貨は叔父の方から送ってもらうことになりました。5ドルといえば、運転手にとってはちょっとした大金のはずなのですが。』

「日本人の友人がいる人なら誰でも、日本人は親切にされたことに対してどんなに感謝するかを知っています。そしてそれを何年経っても覚えていることも。大勢のアメリカ人が

帰国した時の感動的な出来事が1941年5月7日の手紙に記されています。神戸と横浜の港での光景は決して忘れることはできません。文字通り何千人もの日本人が、アメリカ人の友人を見送りに来てくれました。アメリカと日本の国旗を打ち振りながら、歌と涙と贈り物で溢れていました。小柄な白髪の女性など、ランやその他の花々に埋もれてしまいそうなほどでした。「鎌倉丸」の日本人の船長さんが、おいしい食事を宣教師のグループにふるまってくれた時、こんなに露わにした感情表現は今まで見たことがないと言っていました。今まで宣教師が日本人にとってどんなに大切であったかがわからなかったとしたら、この光景はおそらくそうしたことが一目で分かったはずです。」

「日本から帰ってきた宣教師は大抵、日本のキリスト教の友人たちに対して信用や信頼の気持ちを持っています。そしてもし戦争になった場合、困難から救ってあげたいと願いつつ、日本を去りました。」

ルミスさん自身が、その経歴から見て、忍耐と理解を通して成し遂げたい例であろう。彼女は幼年時代を日本で過ごし、学業のためアメリカに戻った。スミス女子大学を卒業した後、コロンビア大学で修士号を取得し、再び日本に戻って来た。70マイル先に富士山が見える横浜にある教派を問わない女学校の校長として赴任した。この学校は、「米国婦人一致外国伝道協会」として統合された団体を通して、ニューヨークのトーマス・S・ドリーマス夫人によって設立されたものであった。日本での仕事が始まったのは、1878年に日本が3世紀にも及ぶキリスト教禁止令を解いて間もない頃であり、それまではキリスト教徒であることがわかると、誰であろうとも死刑を命ぜられた。しかし学校の進展は、「日本婦女英学校」と呼ばれているが故に、理解されておらずなかなか発展しなかった。女子に教育をするという考え方をばかにする人も多く、女子を学校に入れることに対して、報酬を得るべきだという人もいた。

ルミスさんが赴任した頃は、ピーター・バーリーの歴史の本が使われ、同様に1859年に出版された地理の本がまだ使用されていた。宣教師でもある先生たちは、日本語を学ぶ機会がほとんどなく、そのため授業のほとんどは英語で行われていた。子どもたちは、教科書の意味をほとんど理解しないまま、機械的に暗記し教科書を復唱していた。先生たちが日本語を流暢に話せて書けるようになり、授業教科が増えるにつれて、入学者も増加していった。1900年初頭では80人しかいなかった生徒数は、今では485人になり、入りたくても入れない生徒も多くなっている。

日本語での教育

今日ではほとんどの授業は日本語で行われており、学校は日本政府によって監督されている。この学校は、日本の高等学校課程に相当し、英語の授業は、アメリカの学校でフランス語やスペイン語を教えるような形式と同じである。生徒の大半は通常の授業に加えて料理や裁縫も習う。ルミスさんにとって印象に残っているのは、多くの貧しい農家の人

たちが、自分の娘を受け入れてくれるように懇願したことであった。そうでなければ、結婚する時に有利になる訓練を受ける機会がなくなってしまうからである。

ルーミスさんは1936年に退職し、ニューヨークに帰る際には、日本人教育に対する貢献が認められ、帝国政府から褒章を受けた。ルーミスさんは1938年に再び日本に戻り、日本の古都、京都の大学で教鞭をとった。絶え間ない日米の緊張関係によって、多くのアメリカ人が出国を余儀なくされるまで滞在を続けた。大学で教えながらルーミスさんは、戦争の重圧が学生の生活にも迫っている様子を見てとることができた。学生たちは政府による拡大政策や戦争政策に反対していたので、全ての学生集会は秘密警察により監視されていた。アメリカ人たちは、発言に注意するように、そして1人では不用意に出歩かないように常に警告されていた。軍事産業に対する需要と絶え間なく増大する負債によって、生活水準が悪くなっているのは誰の目からみても明らかであった。冬の気候はニュー・ヘイブンとほぼ同じであるにも関わらず、多くの学校では1月になるまで暖房を入れてもらえなかった。炭と食料は厳しく制限され、一般の家庭はかなりの打撃を受けていた。男女を問わず軍事産業に駆り出され、陸軍は徐々に優秀な若者を奪い取っていった。

このような外国人や外国の習慣に対する敵対的な空気の中、クララさんの目には日本人の典型的な行動を表わすと思われる出来事に遭遇した。クララさんが住んでいた地域の住民たちが大規模な集会を開いたのである。外国人について、そして外国人とどのように接するのかを議論するためであった。クララさんの料理人をしていた日本人女性はこの集会で、クララさん本人は誠実で、日本人の教育にも協力的であることを述べた。翌日、住民の代表者は、もしクララさんが日本に留まるのであれば、もともと乏しい食糧や燃料の配給切符をクララさんにも分け与えることを約束してくれた。

こうした張りつめた日々のなかでも、日本人のユーモアのセンスが途絶えることはなかった。1人のアメリカ人女性が、一緒に通勤する人たちに常に笑いを与えていた。路面電車のなかで、その女性はあえて「外国人スパイに注意」と書かれた大きなポスターの下に座ってみせたからである。

このようにユーモアも見られたが、悲しみも非常に大きかった。中国との望まない戦争によって、夫や父親を失った女性や子供は数千人に及んだ。前線から休暇で帰国した男たちは、前線の状況について話し合わないよう警告されており、国民の士気を高め続けるために、新聞やラジオは厳しく統制されていた。西洋的な考え方を持った自由を求める若者の多くは、戦争に参加するよりも自ら命を絶つ方を選んだ。

ルーミスさんによると、今、日本が困難に直面しているのは、現在権力を握っている少数派の軍事派閥が原因だという。日本が他の先進国と張り合う契機となったのは、日露戦争に勝利したことに始まっており、あともう一度大勝利を収めれば、日本はアジアにおいて支配的権力を樹立し続けることができるとというのが、軍の首脳部の主張であった。

現在の中国との戦争に対する否定的な感情や、アメリカとの衝突に対する嫌悪感を日本の大衆は抱いているにもかかわらず、日本人は政府を迷うことなく支持するのは確かだとルーミスさんは言う。日本人は、愛国と滅私の精神を非常に強く心に植え付けられているために、もう後戻りはできない状態である。勝利する見込みはほとんど無いにもかかわらず、日本兵たちは祖国のために戦い続け、そして死んでいくことになるだろう。悲劇的な間違いを認めて面子を失うという東洋人の恐怖はあまりにも強く、屈辱というリスクをとることはできないのである。禁欲的で何も言わずに耐えること、敗北する可能性などは決して考えないという態度が、日本人の美德として求められるのである。

2. ジェフリー・ゴラーの生い立ち

クララ・ルーミスをインフォーマントとして資料提供を受け、日本人の性格構造を書いた、ジェフリー・ゴラーとはどのような人物なのか、紹介をしておく必要があるだろう。彼は1905年にロンドンに生まれ、家庭はかなり裕福であった。ケンブリッジ大学で古典語のラテン語とギリシャ語を学んだ後、ソルボンヌ大学やドイツなどの大学でも勉強している。ゴラー自身がどのようなバックグラウンドを背景にして育ったのかといったことは、『死と悲しみの社会学』の「自伝的序文」に垣間見ることができる (Gorer : 1965 = 1986 : 11-32)。また何故アメリカに渡ることになったのかという点についても簡単に説明しておきたい。彼の父親、Edgar Ezekiel Gorer はイギリスとアメリカにアンティーク・ショップをもつ art dealer で Chinese porcelain を専門に扱っていた。イギリスではロンドンのニューボンド・ストリートに、そしてアメリカではニューヨークの五番街に店を構えていた。1915年エドガー・ゴラーはルシタニア号のファースト・クラスに乗船しており、アメリカ合衆国での商用を終え、帰る途中この船が爆撃され、43歳で死亡してしまった。

ゴラーは13歳の時、イギリスの有名なパブリック・スクールであるチャーターハウスに入った。1931年、26歳の時、弟のピーターとともにロシアのほとんどの地域を訪れるというソ連邦国営旅行社によるツアーに出かけた。当時としては、かなりの冒険と見なされる旅行だったようだ。3年後の1934年にはコート・ジボワールの赤道付近の森に住むゴロ族を訪れ、その村に滞在する。これが1935年に Africa Dances を生むきっかけとなった。ゴラー自身にとって人生のターニング・ポイントとなったのが渡米であった。

ゴラーがマーガレット・ミードに初めて出会ったのは1935年12月8日であった。1935年12月7日、ミードはゴラーに手紙を書き、会う約束をしている。Dear Mr. Gorer で始まるフォーマルな手紙はこの1通きりであり、これ以降はすべてファースト・ネームで書いている。

明日の火曜日に自然史博物館にある私のオフィスでお待ちしております。電話でもくだ

されば、お約束をアレンジすることができます。お会いするのを楽しみにしております。

(G.C. 2)

この日以来、ミードとゴラーそしてルース・ベネディクトとの学問的な刺激的な輪が形成されることになるのである。ゴラーは、ベネディクトに比べてミードとの手紙のやりとりは頻繁で、サセックス大学に保管されているゴラー文書だけを見ても、1935年から1954年までで436通の電報や手紙が保管されている。

ゴラーが渡米した頃のアメリカは、アメリカの文化人類学の父と呼ばれたフランツ・ボアズやルース・ベネディクトそしてマーガレット・ミードなどが中心となって、文化相対主義に立脚した文化人類学の分野で活躍していた。そんな折に、彼はアメリカに渡ったのである。*Africa Dances* の出版は多くの著名な人類学者の関心を集めるものとなった。*Africa Dances* は、後のゴラーの人生を決定する作品となった。特にアメリカ自然史博物館に勤務していたマーガレット・ミード、コロンビア大学で文化人類学を教えていたルース・ベネディクト、そしてエール大学のジョン・ドラードは、ゴラーのキャリア形成に積極的に関わることとなった。1935年から1936年にかけて、彼らの学問分野における論理的な背景や方法論といったことを指導する期間となった。

第二次世界大戦にイギリスが宣戦布告をした時、ゴラーはメキシコ・シティにいた。第一次大戦と比して、彼の心の痛手ははるかに小さかったようである。その理由は第二次大戦において、彼はやりがいのある、多くの重要な仕事に専任していたからであると、*Africa Dances* のなかで書いている。重要な研究とは、日本人研究が主たるものの一つであったことは間違いないだろう。

3. ジェフリー・ゴラーの「日本人の性格構造」の背景となった資料

前述したようにアメリカで日本人研究が集中的に行われるようになったのは、1942年から1944年であり、ゴラーはなかでも早い時期に日本研究に取り掛かった一人であった。1941年12月31日付けでゴラーはマーガレット・ミードに手紙を書き、日本関係の文献使用に関すること、そして日本の須恵村に滞在した経験を持つジョン・エンブリーと長時間にわたる話し合いを持ち、主に母親による子供のしつけについて話したこと、またシラキュース大学教授で日本に長年滞在した経験を持つハーリングとも話し合った旨を述べている。(G.C. 3)

エンブリーとの話についてはいくつかの興味ある点が含まれており、とくにトイレット・トレーニングについてはゴラーが持っていた知識を裏付けるものであったようだ。

幼児期、子供時代のしつけに関しては、日本に長年の滞在経験を持つ3人のインフォーマントから得たものであった。そのなかでも最も重要な役割を果たしたのがクララ・ルミスであ

った。

ゴラーにとってクララ・ルミスに関する新聞記事は日本人の心理を知る上で多くの示唆的な内容を含むものであった。記事の冒頭でルミスが語っているように、「国民的な心理に影響を与えてきた日本人の精神や感情の機微、そうしたことをあまりにも無視したことが、現在の行き詰まりを招いた原因の一つである」。打開策としては、「東洋とアメリカの心理上の相違といったことが更に広く理解されることが重要である」とルミスは考え、そのため「日本人の立場に立ってもらい、日本人は信用されているのだということを感じるということが重要である」とルミスは語っており、「何かを成し遂げるためには、日本人の名誉に訴える方が、力の脅威より効果的である」ことを指摘している。そしてルミスはいくつかの興味あるポイントを述べている。以下に示した5つの項目は、それらを要約して示したものである。ゴラーは心理学を用いた研究をしていたこともあり、ルミスによって指摘されている日本人の心情を表わす箇所は、大いに触発されるものであったに違いない。そしてゴラーにとってこの記事に内包される、兼ねてよりアメリカ人が考えていた「不可解な日本人」を説明するためのまたとない機会を与えるものであっただろう。

クララ・ルミスによって指摘されたポイント：

- 第1、「真実に対する日本人の態度」のわかりにくさ
- 第2、「日本人の誠実さ」
- 第3、「日本人は子ども時代から自分の感情をコントロールするように教えられていること」
- 第4、「親切や信頼されたことをいつまでも覚えていること」
- 第5、「愛国と滅私／面子を失うことの恐怖心」

第1に示した「真実に対する日本人の態度」のわかりにくさは特に興味ある項目である。ルミスは「真実」という言葉を用いてはいるが、これは西洋文化では「嘘」は絶対によくないということから、日本でよく使われる慣用語「嘘も方便」をうまく西洋人に理解できるよう、「嘘」という語を敢えて避け、「真実」を言うことで相手を傷つけることを良しとしない日本人の性格を説明したものである。

欧米との比較によってルミスが書いた記事を基にして、ゴラーはこれらの心理的な相違を生み出したものはどこにあるのかを指摘すると同時に、その所以を子供時代のしつけなどに焦点を置いて調査したのである。クララ・ルミスとメッサー夫人 (Messer)、そしてメアリー・ラウス (Mary Rouse) をインフォーマントとしてゴラーはいくつかの調査項目を記している。なかでもゴラー・コレクションに聞き取り調査として残されているのは、ルミスとメッサーから得た資料が中心であった。ここでは日本人の性格構造を形成する上でゴラーが重要視したと思われる項目に焦点を置いて紹介する。 (G.C. 4)

1. Maturation (日本人の成長過程、特に歯が生える時に泣かないようである。子供はその辺にあるものを何でも口に入れる。特に、歯が生える時に特別のものは与えられない。歯が生える時の言い伝えといったものはない。歯が生えると誇らしげに皆に自慢して見せる。歯の掃除は大人も子供も柔らかい棒状のもの的一方をつぶし、岩塩をつけ、水に浸したものを使う。金持ちの子供は金歯をしている。)
2. Crawling (ハイハイについて。ハイハイの行動はあまり望まれない。家のなかには、足元がおぼつかない赤ん坊にとっては、紙の障子は壊れやすく、覆いのない火鉢などがあるため危険である。従って、子供がハイハイを始めると、保護者はすぐに赤ん坊を抱き上げ、背中に負う。おんぶされている時間が長いと、ハイハイをしているのはめったに見られない。ヨーロッパ式のベビーサークルを紹介された母親は、非常に興味もっていた。日本ではそうしたものは作られておらず、明らかにヨーロッパのモデルもコピーされてはいない。頑張っ、立つことやよちよち歩きをするように勧められる。時には、長い布の帯で赤ん坊の動く範囲をコントロールするため、手綱のようにくくり、両端を母親が持つ。子供がよちよち歩き始めると、足にはサンダルが結びつけられる。そして儀式的な時には、鈴がついた小さな草履が履かされ、子どもが歩くたびに快く響く。子供は衣服の着替え、食事など長い間にわたって介助される。幼い子供は大人に早くなるように急かされることはない。どちらかと言えば、その逆である。しかし、早熟した行為に対しては「えらいね」と称賛される。)
3. Speech (幼児期や子供時代の言葉、そして母親が子どもに話しかける言葉。特にこの項であげられている言葉は— hai-cha (おやすみ)、Oi-de (何をしてもそれを止めさせる)、A-bu-nai (気をつけて)、i-ko (いい子)、ka-wai (かわいい)、i-rai (えらい)、i-ki-ma-sen (そんなことをしてはいけない)。インフォーマントが強調して述べていることは、悪い子に対する一般的な言葉はないということである。もし、子供がしてはいけないことや、触ってはいけないことをしたりすると、力尽くで、そして荒っぽく引き離される。3～4歳位から、男の子は癇癪を起し始めるようになり、叫んだり、わめいたりする。こうした状況になると、すぐにキャンディーが与えられる。そしてもし泣きわめく状態が続くときは、一般的によく用いられるほめ言葉「えらい、えらい、男の子でしょ」と言ってなだめられる。)
4. Temper Tantrums (幼児期と子供時代の癇癪のひどさと母親の対応の仕方。暴力的な癇癪は男の子が3歳か4歳くらいの時から現れ、7歳か9歳位になるとなくなる。インフォーマントは授乳幼育している子どもが癇癪を起しているのをみたことがないと言っている。従って、これは離乳かきょうだいが生まれたことで自分のこれまでの立場が入れ代わったことに関係があるのではないか。女の子はほとんど癇癪をもってはおらず、また癇癪をおこすことで罰をうけることも少ない。こうした癇癪を起している時は、全

くどうしようもない。子どもはぶったり、蹴ったり、ドンドンと打ったり、時には母親や姉に噛みついたりもする。女性はそのようなふるまいに対して防ぎきれず、成すがままにしなければならない。こうした肉体的な爆発は父親や兄に対しては明らかに向けられず、要求や命令に対しては「やだ」と答える。そして彼らを強いる方法はない。男の子が話すことができるようになると女性は一目置かなければならない。インフォーマントはある上流の家庭のことを覚えており、それは、その家庭の母親と何人かのお手伝いが、4歳の男の子を「若ご主人様」と非常に恐れていたことである。男の子たちは、何か取り上げられたり、してほしいことが叶わなかったときに痲癢を起こすことはあきらかである。問題はなぜこうした痲癢が治まるのかである。男の子が6～7歳になるころにはもうコントロールしなかったり、痛いといって泣いたりしなくても、いい反応は受けられない。そして我慢することやご飯を食べずにいられること、厳しい寒さに耐え抜いた時に、非常に褒められる。このような極端な寒さや暑さにびくともせず、耐え抜く訓練を受ける。飢えに関する例はあまりはっきりしないが、次のような例がある。子供たちは何も入っていないご飯だけを持ってくる。お弁当はお互いに背を向け合って食べるのだが、ごはんには何か味がついていたら、苦情を受ける。弁当が入っていないのに食べているふりをする人もいる。貧困がひどくなり、昼が配給されるようになると、二口位食べ、残りを家に持って帰っていた。社会が痲癢を起こすのを許さないということから、痲癢をどうしてやめるのだろうかという点に対する答えはないが、仮説は以下の通りである。男の子は女性を完全に支配しているので、肉体的に強くなると疲れるような痲癢を起こすのをやめる。もっと簡単に、自分を満足させるような方法をとるのではないか。痲癢は完全になくなるのではなく、欲求不満になると、痲癢を起こす可能性はいつでもある。学校で大っぴらに罰する必要はあまりない。学生は従順で、10のうち9は服従する。ゲームなどでよくできると、小さな賞が与えられることはよくある。両親、特に父親は子どもが成功することを願っている。

5. Candy (不機嫌な時にはのべつまくなしに与えられるお菓子。人前でも食べるが、大きくなると食べない。)
6. Thumb-sucking (指しゃぶりについて。この点は西洋に比して寛容であると書かれている。)
7. Gifts (どのような時に贈り物がされるのか、そして特に学齢期の子供は遠足などに出かけた折に、お土産を買い求める時間などがあらかじめ設けられている。)
8. Attitude to Money (これはニュー・イングランドの人の観点から見れば、日本人は宵越しのお金を持たない。将来のためにお金を蓄えるということはほとんど無い。)
9. Games (ゲーム、西洋からもたらされたものを除いて、子供用のゲーム器具などはない。囲碁のようなゲームは大人だけが楽しむ。)

10. Gambling (ギャンブルはあまり一般には見られないし、認められていない。)
11. Sex Typing (男らしさ、女らしさといった性差が強調される。)
12. Class Typing (社会階層、子供たちは学校に行き始めるまで、社会階層によって区別されている。)
13. The Displacing Sibling (新しくきょうだいが生ずるとその子にすべてを譲らなければならず、中心的存在ではなくなる。おもちゃなどが与えられるが、我慢を強いられる。年上の子は新しく誕生した子を歓迎するし、抱っこも率先してしたがる。)
14. Miscellanea (負けず嫌いで、知らないということを言いたがらない。わかってもいないのに、わかっていると、厄介なことが色々起きた。)
15. Ghosts, etc. (子供を怖がらせるために幽霊や怖い話を使う。キツネやタヌキが子供を騙し、魂を持っていくというので恐れられている。これは意識的に子供を教育するために使われるが、大人も怖がる。)
16. Handicapped Children (両親は子どもがハンディキャップを持っていることを恥じ、隠そうとする。子供ができないということが、離婚の原因となる。)
17. Suicide (切腹。どうしようもなくなったり、望まないことを強いられることで自殺する。ある意味では痲瘋と同じである。)
18. Entertainment (家に人を招くことは全くない。宴会などで出されるほとんどの食べ物は、食べないで家に持って帰る。)

もう一人のインフォーマントは日本において20年以上も商売をしていた人を夫に持つメッサー夫人で、以下の項目はクララ・ルーミスとメッサーの二人による調査項目であり、主として子供成長としつけに関するものが中心であった。(G.C. 5)

1. Feeding (授乳、子供が泣いたりしたときに、母親が不都合な場合以外は、なだめられ、都合がいい時に授乳される。空腹の前に与えられることもある。きょうだいがいる時に、そのままのかっこうで与えられるし、おしゃぶりはいつでも持っており、おっぱいが与えられない時など、おしゃぶりが与えられる。日本の清潔さは、おしゃぶりについては無視される。)
2. Modesty (子供に節度を教えることの基準。節度がないということは、育ちが悪いのと等しい。節度がないということは、不必要な露出を伴う。それが機能的な時には人前でも授乳したりする。必要がない時、例えば、イブニング・ドレスを着て肌を露わにすると、人を不愉快にさせる。同じ基準が子供にも当てはまる。ある村で、3歳の子どもが不節操な服装をしていたということで、おまわりさんに家に帰らせられたことがあるそうだ。海岸で裸になるのは全く問題がない。節操に対しては、軽く扱われるが、汚ら

しいことに対しては重きが置かれる。自分の局部を露わにしている子供は怒られはするが、穏やかに諭される。)

3. Toilet Training (子供のトイレット・トレーニングについてのしつけの方法。またその厳格さに焦点が置かれている。この情報は不完全なものである。一番小さな子は衣を半分に折ったおむつのようなものをしており、めったにそれは取り換えられないようである。紙は、おむつやハンカチなどのように、拭いたりするような用途では使用されることはない。子どもは保護者によって道端で抱えられ小便をする。家の中ではウンチはせず、ハイハイをするようになると、外で便をするように躡けられる。子どもが犯す最も深刻な罪は、神聖なものとされている「ふとん」を汚すことである。ふとんが大便で汚されるのは見ていないが、食べ物で汚したりすると、一方の手をつかんで、激しく揺すぶられる。)
4. Disgust Reactions (大便と似ているようなものに対する嫌悪、例えば、泥ややわらかいものに対しては嫌悪感を持つ。)
5. Treatment of Child (子供はおんぶされていることが多い。そのため子どもの手足の動きは制限されている。)
6. Etiquette (エチケットは学校で教えられる。子供は6ヶ月位になるとお辞儀をすることが教えられる。また歩き始めると、正座することが厳しく教えられる。)
7. Aggression (日本人は病気や望まない場合を除いて、動物を殺すことを拒む。)
8. General Picture (幼児期はあまりに多くの食べ物を与えられ過ぎである。トイレット・トレーニングは厳しい。子供は従順であることが好まれる。つまり、女の子は受け身で、男の子は活発でなければならない。)

上記の項目について二人のインフォーマントを使ったということは、ゴーラーにとって重要なことであった。彼はこの後に著すことになる日本人の性格構造のなかで明確に述べているが、「インタビューから得た情報は、注意して収集され、再照合された。インフォーマント全員が一致した場合に、資料はある程度、正当性があるものとして扱われた。一人のインフォーマントが、他のインフォーマントが報告していないことが行われているといった場合には、その報告を再チェックすることにした。チェックができない場合には、論理的な見地からその観察が異例なのではないかということで、その報告は採用しなかったか、あるいは注をつけて採用した」。

インフォーマントから得た情報のなかで、ゴーラーが特に力点を置いて調査・分析したのが「癩癩」と「性差」、「階級差」そして「トイレット・トレーニング」であった。「癩癩」を起こす所以、早期の「トイレット・トレーニング」による影響、そしてその背後にあるしつけの厳しさなどが日本人の性格形成、とくに攻撃性などに影響を与えるのではないかという仮説のもとに心理学的に分析している。

4. おわりに

「日本人の性格構造とプロパガンダ」を通してゴーラーは日本人の精神性を西欧と比較分析し、その差異を強調する度合いのなかに日本人の国民性を理解するための鍵を求めようとした。“modesty”では、子供に節度を教えることの基準といったことが述べられ、“toilet training”の厳しさが及ぼす影響について述べる。また幼少期における多くの制限や欲求を阻止されることにより、日本人の生活の根本にある反抗について述べる。儀式に対する献身、整然さと秩序、不潔なものをひどく嫌うこと、無力な人々に対する手加減のない残忍さ、「顔」へのこだわり、(アウトサイダー、つまり他者によって行儀の悪い子供が嘲笑されることに対しては、日本人の両親は神経過敏である)とゴーラーは説明する。さらにゴーラーが指摘している重要なことは、「日本人は攻撃下にあっては、一枚岩のようにしっかり結びつかないことである。日本人は同胞たちに対しては、すぐに背を向ける」。さらに、日本社会における性差の厳しさについても指摘する。「日本の女の子は成長すると、自由はなくなる。しかし男の子の場合、何らかの攻撃的な訓練が許されている。男性は命令する。女性は愛され、冷遇され、さげすまれる。男の子が4歳になると、すべての女性を、母親も含んで、支配する特権を獲得する。男の子は罰を受けることなく、母親を侮辱したり、嘔みついたりすることもある。母親ができる唯一の防御は、甘いものを与えることだけである。」

ゴーラーは日本人に見られる性差の明確なる区別に注目し、特に男性のサディスティックな攻撃心には関心を持って分析している。この分析のためにはハーリングやエンブリーなどの話し合いのほか、他の男性インフォーマントからの情報も得ている。ゴーラーはそのインフォーマントとのやりとりを「子供時代のしつけに関するメモ」のなかに残しているが、そのインフォーマントとはエール大学で教鞭をとっていた政治学者であった。日本に滞在したことがあるという記録は彼の著作のどこにも出てこない。しかし、戦前のある時期、日本にいたことは確かである。彼は日本人の男性に見る穏やかで何気無い表情と、その下に潜むだらしく、いい加減な性格の相違の大きさを強調している。日本人は格式ばった公の顔と、めそめそした酔っ払いという対照的な顔を持つ二重性格であることを指摘している。飲むことで鬱憤を晴らすということが日常的に行われていることも報告している。それはゴーラーが考えていた男性、女性の性差に3つ目の要素である男性の強迫観念の要素を加えたことである。これは、それまでゴーラーが持っていた戦時期における男性のサディスティックな要素をある意味で補完するものであっただろう。日本では男であることはとてもいいことで、支配する立場である。男同士が集まってくつろいでいる時、文化の束縛から解放される。日本人に強迫観念がなければ、日本文化がしっかり見張り役をしていなければ、日本人は簡単に低俗な人間に成り果ててしまうというものであった。また、ゴーラーは、このインフォーマントから得た日本人のホモセクシュアリティについての報告も書いている。(G.C. 6)

ゴラーは、幼少期に受けたトイレット・トレーニングから生じることとして、もうひとつの重要なことを指摘している。それは、清潔さときちんとしていることに力点が置かれ、あらゆるものには、その存在すべき場所があり、あらゆるものはその決まった場所にあるべきだ、ということが強調されている点である。ゴラーが日本人の極度の清潔さと潔癖さに着目して書いた‘doing the right thing at the right time’そして‘place for everything in its place’「あらゆるものにはその存在する場所があり、あらゆるものはその決まった場所にあるべきだ」(Gorer: Japanese Character Structure and Propaganda, p.12-13)は、初期の子ども時代において不適当な場所で間違っただけをすることに対する脅迫観念が強調されているが、べつの側面から見れば、注意深く、決められている通りに、またいわれているようにすれば安心感と満足を得られることも述べている。

ルース・ベネディクトが戦時中に国務省に提出した論文「日本人の行動パターン」のなかで、日本人の倫理規範を分析するために‘everything in the right place at the right time’ (Benedict: Japanese Behavior Patterns, p.38)「万事に適所と適時あり」というフレーズを用いて書いている。ベネディクトは、「日本の倫理基準は、個人に多大な損失が求められているという点が強調されてはいるが、場所柄さえわかまえていれば、肉体的な充足感を得ることを認めているし、奨励もしている。ピューリタンの厳格な規範のように、肉体的な快楽を罪としてとがめることもなければ、自由主義的なキリスト教の教えのように快楽を罪としてとがめることもなければ、キリスト教の教えのように快楽の剥奪を神の意向への服従と捉えることもない。たとえば、キリスト教徒の祈りの言葉に『御心が成りますように』というものがあるが、これは一般的なキリスト教解釈によると、神の意向は人間の自然な意志とは異なるけれども、神に従うことで人は精神的に自分を高められる、ということの意味している」と説明する。しかし、「日本の規範はそうではない」。ゴラーの分析が脅迫観念に力点を置いているのに対し、ベネディクトの分析では場所柄や時さえ間違えなければ、それなりの充実感を得ることができるのだというものである。ゴラーの分析では十分には書き及ばなかった点を発展させることで、日本人の規範意識に内包される複雑な構造を指摘すると同時に、西洋の倫理規範との相違についても考えさせるものとなっている。(Ruth Fulton Benedict Papers 以下 RFB とする。RFB 1)

ベネディクトはこの「万事に適所と適時あり」を『菊と刀 日本文化の型』では1章を使って、3章「各々其ノ所ヲ得」‘Taking One's Proper Station’を書き、日本人の行動の背景にある規範に対する意識を表わす重要な章を書いたのである。

このようにして、インフォーマントから得た情報にゴラー自身の解説と分析を加えて完成した論文が「日本人の性格構造とプロパガンダ」であった。この論文は、後に本格的に行われることになる日本人研究に大きな影響を与えた作品である。これについては『象徴天皇制の起源』(加藤：2005：142-143)にも書かれている。

…1942年4月20付で、情報調整局（The Coordinator of Information: COI）ドノヴァン長官は、部下である調査分析部（Research and Analysis : R&A）の文化人類学者グレゴリー・ベイトソンにも、感謝状を贈っている。それは、ベイトソンがイギリスの人類学者ジェフリー・ゴラーによる「日本人の性格構造」についての報告書をドノヴァンに届けたことへの礼状で、「これは実に面白く役に立つ研究だ。われわれの仕事に役立って嬉しい」と手放して絶賛している。ドノヴァンの R&A 報告書や個別研究へのこのような反応は、極めて珍しい。

ゴラーに「日本人の構造とプロパガンダ」をドノヴァンに送るように提案したのは、ジョン・エンブリーによるアドバイスもあったと思われる。1942年4月2日付のエンブリーからゴラー宛ての手紙には修正を含めて、レポートを COI（情報調整局）に送るようにアドバイスしている。（G.C. 7）

COI については山内論文に詳しい。1925年に発足した IPR（太平洋問題調査会、Institute of Pacific Relations）は、アジアの問題を研究していた NGO（非政府組織）で、太平洋戦争中アメリカの IPR のメンバーが国務省を中心として極東政策の立案と遂行にあたった。1941年7月11日にはアーチボールド・マクリュースユ米国議会図書館長の呼びかけで、ACLS（全米学術団体協議会、American Council of Learned Societies）を初めとしてアカデミズムの主要団体から要人が集められて COI（情報調整局）が発足している。（山内：2008：2）

ゴラーの日本人研究についてはジョン・ダワーも『人種偏見』*War Without Mercy* のなかで高く評価している。

戦時中に発表された「日本人の性格構造」についての唯一最大の影響力のある学問分析は1942年3月にアメリカの学者たちに配布され、43年の末頃、学術誌に要約された形で掲載された論文であることに間違いなかった。筆者は、イギリスの社会人類学者ジェフリー・ゴラーで公表の場は狭い範囲であったが、重要かつ多彩な読者の目に触れることとなった。ゴラーは「文化とパーソナリティー」の研究に携わるアメリカの学究たちと親しく、戦時情報局の「外国士気分析課」が行った日本人の行動分析に短期間ではあるが関係していた。

（ダワー：1987：163）

ダワーが言う「学術誌に要約された形で掲載された論文」とは“Themes in Japanese Character”（「日本文化の主題」）のことを指していると考えられる。これはゴラーの「日本人の性格構造とプロパガンダ」を要約して書いたものである。「日本文化の主題」の大きな特徴のひとつは、日本人の性格構造に見られるパラドクスを巧みに叙述した、あのよく知られた at the same time や and yet を用いて書いた箇所であろう。

うわべからみると現代日本は、私たちがこれまでなんらかの記録をもつ文化のなかで、もっともパラドキシカルなもののようなものである。どうして同一の文化が——しばしば、同じ人が——優雅さと静寂、詩情に満ち、巧妙で高度に儀式化した象徴的な茶道をたしなみ、他方では、南京略奪のような、ほとんど信じられないような残酷さと欲望と破壊とをほしいままにすることができたのだろうか？ おおぜいの人が、花見をしたり、蟬の声に耳を傾けたりすると同時に、なぜ組織的かつ意欲的に、全住民をアヘン中毒におとし入れるといたったことができたのだろうか？ 天皇自身も競技者として加わるような、まじめで叙情的な歌会を催す一方、なぜ、肉弾の——高性能爆弾をかかえて死んだ三勇士の——神社を建てることができたのだろうか？ 私たちの知っているなかで、もっとも洗練された絵画芸術を発達させながら、しかも、そのもっとも高名な画家の作品の大部分が春画であって、ヨーロッパやアメリカでは絶対みられないようなものであるなどということが、どうして可能なのか？ 近代社会のきわめて精緻な複雑さをとりいれながら、政治、宗教、社会の各部分において、主要な産業国家よりも、むしろ、孤立した原始部族にちかいような世界観をどうしてもち続けているのだろうか？ (山本澄子訳：1966：63-64)

ゴーラーが初めて書いた論文「日本人の性格構造とプロパガンダ」のⅠ章では、平均的な日本人の性格構造とは何かについて書かれ、Ⅱ章では、日本人を戦争に駆り立てた、過去からその当時に至るまでの経済的・軍事的な面から理由を探っている。Ⅲ章では、日本人にもっとも影響を与え得ると考えられるプロパガンダのタイプのいくつかをあげ、さまざまな側面からその有効性を検討し、提案している。アメリカのエール大学、ヴァッサー大学、その他の研究機関にもゴーラーのレポートは保存されているが、アメリカにあるものはすべてⅢ章が削除されている。つまり、ゴーラーが書いた完全な原稿はサセックス大学にしか残されていない。(G.C. 8)

本論文を通して、ジェフリー・ゴーラーが日本人研究に際してどのような資料を基にしたのか、資料提供者とはいかなる人物であったのかを多少とも明らかにすることができたのではないかと考える。これまであまり注目されていなかったゴーラーの日本人研究の影響は想像以上に大きいものであったに違いない。「日本人の性格構造とプロパガンダ」に始まり、“The Special Case of Japan”（「極端な事例：日本」〈仮題〉）で終わる彼の日本研究の詳細については、今後の研究に俟ちたい。ゴーラーに関する研究はまだ緒についたばかりである。

この論文を作成する過程で、クララ・ルーミス女史に関する資料、写真など横浜共立学園にはたいへんお世話になりました。ここにお礼を申し上げます。しかし、文責はすべて私にあることをお断りいたします。

注

- 1) 2004年11月5日発行の「日本英語教育史学会（185）の（寄贈図書の紹介）欄に「高林茂会員より、以下の図書を御寄贈いただきました…。
- (1) Clara D. Loomis. *Manners and Customs of the West*. 横浜共立学園 1996 再刊（初版はヘラルド社 1930）88 頁
- (2) 横浜共立女学校校長 クララ・デニスン・ルーマス著『西洋の社交と礼儀（改訂新版）』横浜共立学園 1996 [初版はヘラルド社 1931] 177 頁
- 【ひと言】(2)は(1)の翻訳版で、復刻に際しては新字・新かなづかいに改めてあるため、たいへんよみやすい。私立の名門高等女学校だった横浜共立女学校の校長・米人ルーマスが、「東洋各国の若者たちが他国の文明を理解し、東西両洋の友情を深める上に一助となり得る」ことを願って執筆したもの。高林会員が古書店で(2)を、国会図書館で(1)を発見し、ともに横浜共立学園から復刻・再刊された。昭和初期に刊行された幻の異文化理解教材で、学術的価値はきわめて高い。（事務局）

参考文献

- 岡部一興編・有地美子訳『宣教師ルーマスと明治日本』有隣堂 2013 年。
- 近藤淳子 1978 年「天皇制機構温存過程考」『日本占領軍 その光と影・上巻』137-158 ページ
- ダワー・ジョン 2001 年『容赦なき戦争——太平洋戦争における人種差別』斉藤元一訳、平凡社。
- 『同志社——その 100 年のあゆみ』1975 年 11 月 29 日発行、発行所：学校法人同志社。
- 山内晴子 2008『朝河貫一研究会ニュース』No.67。
- Benedict, Ruth. *Japanese Behavior Patterns*. R. ベネディクト『日本人の行動パターン』福井七子訳、NHK ブックス、1997 年。
- Benedict, Ruth. 1974 (orig. 1946) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Tokyo: Charles E. Tuttle Co. 長谷川松治訳『菊と刀—日本文化の型』社会思想社。1948 年、1995 年初版 45 刷。
- Dower, John. 1986 *War Without Mercy: Race and Power in the Pacific War*. New York: Pantheon Books.
- Gorer, Geoffrey. *Africa Dances*. First published by Faber and Faber in 1935.
- Gorer, Geoffrey. 1942 *Japanese Character Structure and Propaganda*. Committee on Intercultural Relations.
- Gorer, Geoffrey. 1943 *Themes in Japanese culture*, *The New York Academy of Sciences*, 5: 106-124. Reprinted in Haring Douglas, ed., 1948 *Personal Character and Cultural Milieu*, pp.273-290, New York: Syracuse University Press.
- G・ゴラー「日本文化の主題」山本澄子訳『日本文化論』（近代日本の名著⑬）東京：徳間書店、1966 年。
- Gorer, Geoffrey. *The Special Case of Japan*, *The Public Opinion Quarterly*, School of Public Affairs Princeton University, 1943.
- Gorer, Geoffrey. 1965 *Death, Grief and Mourning in Contemporary Britain*. London, Cresset Press.
- G・ゴラー『死と悲しみの社会学』宇都宮輝夫訳、東京：ヨルダン社、1986 年。
- RFB = Ruth Fulton Benedict Papers（ヴァッサー大学のベネディクト・コレクションに保管されているベネディクト関連文書）

1 Japanese Behavior Patterns

G.C. = Gorer Collection (サセックス大学のゴラー・コレクションに保管されているゴラー関連文書)

- 1 Box No. 28. New Haven Register, Sunday, Nov. 23, 1941.
- 2 マーガレット・ミードからゴラーへの手紙、1935. 12. 7.
- 3 Comment from Haring to Gorer, 1942.4.5.
- 4 Notes on Japanese Childhood Training (Informant: Miss Clara Loomis)
- 5 Notes on Japanese Childhood Training (Informants: Miss Clara Loomis, Mrs. Messer)
- 6 Notes on Japanese Childhood Training
- 7 エンブリーからゴラーへの手紙、1942. 4. 2.
- 8 Japanese Character Structure and Propaganda.